異世界生活始まりました

リプレイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界生活始まりました

【Ｎコード】
Ｎ８４５４Ｖ

【作者名】
リプレイ

【あらすじ】
何となく異世界物を書いてみます。

プロローグ

「はぁはぁ・・」

空を仰ごうとすれば深い緑が邪魔をして空を見ることも叶わず、周りを見渡そうとしても大人の背丈程の幅を有する巨樹が乱立し視界を奪う。

そんな太古の森を想わせる森の中に、1人の男が息も絶え絶えに人生始まって以来の命を懸けた闘いに勝利していた。

「はぁ…はぁ」

未だに息は整わないが、目の前にある、先程まで自分の命を狙って居たであろうトカゲみたいな生物だった物から目が離せないでいた。

「何なんだこいつ？」

男の記憶の中にこれと似た生物は確かにいる。

だが、それは似ているだけで決して存在するはずがない生物、トカゲの様な外見で後ろ脚だけで立つ中型犬程の大きさの恐竜みたいな生き物。

「恐竜じゃ…無いよな・・」

男が存在を否定したい理由は何万年も昔に滅んだ恐竜みたいな姿だからでわなく、その背中に飛ぶ事は無かったが確かに羽ばたき、グライダーの要に滑空してきた翼が有るからだ。

「これが前脚…で、こっちが後ろ脚…なのに翼が有る……進化論的に有り得ないだろ……ここは何処なんだよ…はぁ…」

数時間前の回想…

独りの男が道を歩いていたらたまたま蓋の開いていたマンホールにドボン。

気がついたら真っ裸で森の中。

熊さんならず、翼の生えた小型の恐竜に襲われキャー。

ひたすら逃げようとしたけど追い付かれキャー。

仕方なしに滑空してきた恐竜もどきを避けるためにしゃがみ込んでだら恐竜もどきも目の前に着地、こちらを振り返る前に尻尾を掴んでジャイアントスイング、遠心力を活かしたままに樹の幹に呻き声が聞こえなくなるまでぶつけまくる。

樹にぶつける事２０回位で先程の現状のできあがり。

回想終了…

以上の結果、男は自分が異世界に来たことを確定。

…えっ短絡的、だってしょうがないじゃないか。

恐竜みたい奴に前脚と、後ろ脚がある上に、翼が在るのだよ。もしこのまま進化したら、腕が四本在る生物が当たり前になるじゃないか。

と、自分に言い聞かせ無理やり納得した。

『ここが異世界だとしてテンプレ道理なら、人間もしくわそれに準ずる生き物も居るはずだ。居なかったら……考えないでおこう』

男は自分を奮い立たせ、右手に勇気を、左手には決意を持ちどこに居るかも分からない人間もしくは、人間に準ずる生き物を探す旅に出ることを決心した。

「よしっ」

パンと両手の平で頬を叩きつけ、気合いを込めると。

ガサッ、ガサッ。

男の額に汗が浮かび上がり、込めた気合いで回れ右をして全速力で駆け出した。

「キャルルルル～」

その後を恐竜もどきの軍団が見送る事をせず、別れを惜しむ恋人のように全速力で追い掛けて見えなくなった。

「来るな～～」

「キャルルルル～～」

男の名は未だに不明

この世界に迷い込んでから既に１３２日。
男は未だに生存し、生きる人間を探していた。
つい２日程前に人間が居ることを確認出来た時の吐き気、嫌悪感…未だに忘れるずにいた。　岩と岩の間に座るように佇み、皮で出来たような鎧を付け、右手の側に人の身の丈程もある大剣を置く見た目で男だろうと判断出来る容姿をしていたが、肌の色は腐ったバナナの様な色で、鎧の隙間から覗く肌の中から蛆虫みたいのがクチュッ……
と、まあ第一異世界人との対面が男にトラウマを残したのは言うまでもなく、慰謝料として側にあった大剣を貰い、また人間捜索を再開したのが２日前の事だった。

「ふぅ…この辺で良いか」

小川のせせらぎをＢＧＭに少し開けた若草生い茂る絨毯の上、動物の皮で出来た風呂敷から干し肉を取り出し、腹拵えを済まして、動物の皮で出来た腰巻きを外し小川の側に大剣を置き、４日振りの水浴びをする。

「つべてっ」

小川の水は直接浴びるには冷たいが、前は当たり前のように毎日風呂に入っていた男からしてみれば冷たいなんて言ってられず、未だに慣れない冷水で身体を濯ぎ、やたらと固かった恐竜もどきの

骨を研いで作ったナイフで髭を剃る。
　このナイフは、この世界に来て3日目位の頃に何時ものように現れる恐竜もどきをジャイアントスイングで倒して、空腹の限界に達していた男が意地でも恐竜もどきを食べようとしたのだが、皮が堅くて裂くことが出来ず苦渋の決断として口から手を入れ、内側から肉を取った時に付いてきたおまけである。後は密度の関係上、石でナイフを作るより骨の方が鋭いだろうと思い一生懸命作ろうとしたのだが、これがまた硬いのなんので作り終わるのに2日も掛かってしまった。
　追記、恐竜もどきの爪でも同じようにナイフを作ろうとしたが、石とこすったら火が出たので断念。
　今ではライター替わりに持ち歩いています。
　異世界って不思議が一杯。

「おっ、魚が。
今日はあいつを食べるか」

　ひげ剃りを終えて顔を洗っていたらふと魚が目に入り、急いで手頃な樹の棒を切り出し、ナイフを獣の皮を裂いて作った紐で結び付け簡易の銛を作り上げて魚を脅かさないようにゆっくりと小川に身を沈めていく。

『おっ、結構でかいぞ』

　なるべく音を立てないように、腰までの深さ程度しかない小川を魚と共にゆっくりと下り、銛の届く範囲に入った瞬間。
　鋭く突き出された銛が魚を貫通し、慣れた手つきで魚を取り上げエラから口に紐をとうしてそれを左手に持ち、また次の獲物を捕まえて行く。

7匹程捕まえた時、男は結構な距離を流された事を悟りいったん切り上げようと川から上半身をおこしたら。

「へっ……」

「んっ……」

「……」

「う～ん、落ちない」

岸の方に裸の女が2人、その側で洗濯をしている女が1人、こっちをじろじろと伺うように見ていた。

「あんた、泳いで来たの」

「えっ・あっ、はい」

「でもこの先に村は無かったはずだよ」

あろう事か、裸の女は自分の肢体を隠そうともせずに褐色の肌を晒し、実りすぎた二つのおっぱいが強い主張をしていた。

「アン、それよりも見て」

もう1人の裸の女も健康的な白い肌を晒し、ちょっと控え目な胸を隠そうともせず、堂々と男の左手を指差す。

「あっ、香魚！」

褐色のおっぱいがこちらを指差し、おっぱいが揺れる。

「でしょう！」

白いおっぱいが興奮気味に叫び、おっぱいが微震する。

「あなた、それ一人で食べるの？」

褐色のおっぱいが問いかけてくる。

「良ければ少し分けて欲しいのですが？」

白いおっぱいも問いかけてくる。

「はっはい」

「「やったー」」

２組みのおっぱいが揺れる揺れる。

「やったねレミ」

「久しぶりに香魚が食べられますね」

２人は相当嬉しいのかニコニコ話しながら岸に上がっていった。

おっきなお尻と、小ぶりなお尻がプリンプリン。

ついでに男の息子が１３２日のぶりに目にする女、それも全裸の女に…

『きり～つ、礼・ありがとうございます』

「早く～！」

「おいファラ、洗濯は後で良いから火をおこすぞ」

「は～い」

『こらっ、白いおっぱい下ぐらい隠せ～！』

この後出るにでれない男にじれて、２人の全裸の女が強制執行を下したらしい。

もちろん大剣は忘れ物として扱われました。

自己紹介にて

パチパチと音を立てながら燃える焚き火と、簡易に作った木の串に刺さる香魚と呼ばれた魚が火にあぶられ何ともいえない香ばしい匂いが漂う中、体育座りで焚き火に背を向け明日に向かって今生の嘆きを歌う男の背がどうしようもない哀愁を漂わせる中。

「あの、そんなに落ち込まないで下さい…」

「そうだ、お前だって私達の裸を見ただろ、しかも顔もろくに見ず胸ばっかり見て」

ギクッと効果音が出そうな程肩をビクつかせて男が女達の方を向く。

「その節は誠にありがとうございました」

「裸を見た位でお礼をされるとは、よく分からん」

男はその言葉を聞きまじまじとアンと呼ばれている女を見る。

褐色の肌に長く尖った耳に銀色の髪、切れ長の目の奥で光る赤色の瞳。

はっきり言って美人だ、その上におっぱいもお尻も大きくグラマラスな美人だ。

「そうですよ、私達も見られてあなたのも見た、これで平等ですよね」

レミと呼ばれる金色の髪にクリッとした目に引き込まれるような翡翠色の瞳少し幼さの残るような顔立ちが彼女の魅力を余計ひき

だしている。
おっぱいは少し寂しいが、ウエストは引き締まりもう少し身長があればスレンダーと言っても良いほどのスタイルだ。
「ファラは見られてないですよ……んにゃっ」
ファラと呼ばれた娘が男に話し掛け、目が合った瞬間に男が後ろに回り込み耳をもふもふしだした。
「ひゃぁ～み・みはだめ～」
聞く耳持たず、ファラと呼ばれる娘は白い透き通るような肌に、少し垂れた目に金色の瞳、魔物に取り憑かれたようなおっぱいをぶら下げている。
だが、この娘の魅力は赤髪の両サイドからのぞくライオン耳の形のような頭髪と同色の毛に被われたケモ耳。
もふもふ…もふもふ…気持ち良い。
「今日ここに宣言するこの耳は……俺のものだ～」
「おいっ、会ったばかりでそ…んふぅん…んぅ…」
アンのエルフのような耳も良いな、ヒヤッとしているけど、クリッとしてフニャッと癖になる。
「んっ……そろそろ…やっ」
「これも今日から俺のものだ～」
ファラもアンも全身から力が抜け落ちその場にへたり込んだ。
「その辺にしていて下さい、そろそろ香魚が焼けますよ」

なんかレミが不機嫌に見えるがひとまず香魚を食べることに専念した。

「ふ～、食った食った」

「ふむ、美味だった」

「美味しかったですね」

「うん」

三者三様の感想を述べ食後の余韻に浸るなかで、男は自分が名前すら教えていないことに気付いた。

「おっ名乗り遅れた」

「うむ、遅すぎだ」

「遅すぎます」

「遅い～」

ちょっと面目なく思ったがこのまま自己紹介する事にした。

「俺の名前は、ロック。

只の迷子だ」

勿論偽名である。

だがロックにとってこちらの世界に来て1からのスタートを切るため、名前を変え気分新たに異世界生活を満喫するに当たってこ

れが本当にの名前にすると決めていた。

「私はアンだ、よろしく頼む。だが、迷子とは何故だ？」

「私はレミです、よろしくお願いします。どこから来たのか分からないのですか？」

「ファラだよ、よろしくね～」

迷子の件は、迷子にはなったがあんな所には二度と戻りたくないと断言した、理由はみんなからイジメられた事にしといた。

「そうなのか、確かに黒髪など珍しいがそんな排他的な場所が在ったのか」

「髪の色が珍しいからですね、私達はそんな事気にしないですから安心して下さい」

「…お腹一杯…ねむぃ」

微妙に1人どうでも良さげだが、気にせずに、黒髪が珍しくてラッキーと思い、後付けでこの髪のせいにしといた。

「そろそろ村に帰りましょう」

「そうだな、何だかんだで時間が結構たったな。みんなが心配する前に帰ろうか」

「…ぅん…スピー」

香魚を焼いた焚き火を片付け、ファラが途中だった洗濯をテキパキとアンとレミが終わらして直ぐに帰る準備が整った。

「こっちに私達の村がある、ついて来い」

アンが先導して村に帰ろうとするがロックが動かないので不思議な顔をしてふりかえると。

「…なんか着る物貸して下さい」

「「「……」」」

余りにも自然に全裸の自分に彼女達が接していたために、すっかり忘れていたロックだった。

トルテ村に到着

香魚を採った川沿いを下り、緑香る林道を歩いていく４人。
前を歩く彼女達の服装を見ながら色々とこの世界の文明レベルを考える。
アンは、革でできたビキニトップに紐パンツを履き、その上から麻で出来たようなひも留め式の膝下までである腰巻きを巻いている。スリットが艶めかしい。
レミは革のチューブトップにこちらも紐パン、アンと違うのは腰巻きが短い股下１０センチも良いところだ。
ファラはおっぱいが大き過ぎるのか、スポーツブラのようにおっぱい全体をしっかり包み込む色気の無いトップに、パンツは見ていないが革で出来たホットパンツに下着ラインが出ていないのは確認している。
そして俺だが、ファラのホットパンツは無しとして、えっ俺の“フォー”が見てみたい。
古いの分かっています。
仕方なくアンの長い腰巻きを借りています。
総合するにこの世界の衣服に関係する文明レベルは相当低い事が分かる。

道すがらに色々と聞いたのだが、アンはダークエルフで、ファラは獣人だて言っていた。
俺の村には人間しか居ないと言ったら自分達から教えてくれた。
他にもドワーフなど居ないのかと聞いてみたらなんだそれと一蹴され、後は竜人しか居ないと言われた。
負けじと竜人は珍しいのかと良くある異世界物語を思い浮かべながら聞くと、人間と竜人とエルフ（ダークエルフも含む）が同じ

くらいで、獣人が一番繁殖力が高いそうだ。

「そろそろ付きますよ」

レミが俺を思考の渦から引っ張り出すように村に着く事を教えてくれた。

「楽しみだな、みんなはどんな村に住んでいるんだろうな」

「それは着いてからのお楽しみです」

金色の髪がフワリと広がりこちらを振り返ったレミの顔にドキッとしたのを必死に隠しながらアンに質問をする。

「アンはダークエルフ何だろ、エルフも村にいるのか？」

ロックはエルフとダークエルフが犬猿の仲と考えて聞いてみると。

「私以外にダークエルフは居ない。

そもそもダークエルフ自体珍しいんだ、エルフと獣人の間に出来た子供は高い確率で獣人になり、低い確率でエルフが産まれる。

その中で両方の血を強く引いたのがダークエルフとされている。

だから村に居るエルフはレミよりも貧弱な胸ばかりだ」

「ちょっと、私を比較対象にしないで下さい。

でもダークエルフは確かにずるいです、獣人のような筋力に、エルフと同等のエーテル上限なんて卑怯にも程があります」

「またレミは嬉しいこと言ってくれるじゃないかい」

レミのずるい発言もアンは何てこと無いかのように流したが引っ掛かる言葉が出てきた。

「なぁレミ、エーテル上限ってなんだ？」

「「えっ、知らないの」」

「いやっ、前の村でイジメられてると言ったがそれ以外にも何も教えてくれなかったからな」

ロックがしまったと思い、苦し紛れの言い訳がこの程度しか思い浮かばずしどろもどろに言うと。

「そうでしたね…すみますん」

「すまなかった、悪気は無かった許してくれ」

どうにかごまかせました。

それから詳しく聞くと、エーテルとは、自然界に流れる不思議パワーで男達はそれを自分の体内で作りだす事が出来、女達はそれを身体の内に溜めることが出来るようだ。

彼女達の露出が高いのは、直接肌からエーテルは吸収されるみたいで、狩りに行かない時など出来るだけ肌を晒してエーテルを体内に取り込んでいるようだ。

この時初めて聞いたが、彼女達はハンターという、狩りを専門の職業につき3人でパーティーを組んでいるそうだ。

「着いたぞ。ここが私達の村、トルテ村だ」

アンが豊満な胸を張り、目の前にある人の2倍はあろうかと思

われる木の柵で囲まれて中の見えない村であろう場所を指差す。
「はいはい、中に入ってから紹介しましょう」
「うっ、すまない」
レミの尤もな意見にアンは少し落ち込みながらも柵に沿って右に進んでいくと柵の間が車一台位通れるスペースが在った。
「あそこから村の中に入ります」
「あんなに開けといて大丈夫なのか」
「大丈夫じゃないさ。
あそこから忍び込もうと獣達も良く押しかけるさ、そのために私達ハンターが居るのだからな」
また一つ、この世界か分からないが、少なくともこの村に門を建てるという技術がない事が分かった。
「こんどこそ、ようこそいらっしゃいました。
ここが私達の住む村です」
柵の隙間を抜けると、目の前にログハウス風の家々がまばらに建ち、奥に先ほど香魚を捕った川が流れその前にひときわ大きな家が建っている。
「なんか落ち着く村だな」
アルプスの麓の村を彷彿とさせるようなのどかな風景が目の前

に広がっていた。

「だろう、私達自慢の村だからな」

「自慢するだけの事はあるな、こんな所に自分も住んでみたいもんだ」

「何を言っている？ロックもこの村に住むのだろ」

「いいのか？いきなり来た見ず知らずの俺なんかを受け入れて」

「見ず知らずも無い。結婚するのに別々の場所に住む道理も無かろう」

「結婚？誰と誰が」

「勿論、ロックと私とファラだろ。成人を迎えたエルフと獣人の耳を触るのはプロポーズとみなされ、私達はそれを達するまで受け止めたから同意と見なされるのだ」

後半こそ頬を赤らめ説明するがロックにとってこれ以上ない申し出だった。

『ふふっ、普通の異世界物語ならここで知らなかっただから結婚出来ないなどヘタレも良いとこの坊ちゃん主人公が主だが、俺は違う』

「そうか…知らなかったとは言え耳を触るのにそんな意味があったのか…分かった結婚しよう」

「そうか良かった、きっとファラも喜ぶぞ」

「ん…妻を何人も娶って良いのか？」

「ロックの前に住んで居た村は同か知らないが、この村は女が受け入れれば何人娶っても大丈夫だぞ」

『きたー、異世界サイコー！これからハーレム…』

「でも」

ロックの思考を遮り、アンが

「でも？」

「それだけの力この場合は財力だな、より大きな畑を持つか、より多くの獲物を狩ってくるか、前者はこの村には既に余っている畑は無いからハンターになってより多くの獲物を狩って貰うからな」

「えっ、例えば2人を嫁にするとしてどんな獲物を狩れば良いの？」

「そうだな…私はよく分からないが、レミどの位だ？」

「そうですね…家の父に3人の母が居ますが、１０日で最低でもリーフドラゴンを3頭ですかね」

「えっ、ドラゴン…」

「レミの親父はハンターとしても腕は一流だからな」

「いやっ、ちょっと待ってドラゴンってあのドラゴン？」

「そうですよ、あのドラゴンです。
それでは今日は村長に挨拶して、明日にでもリーフドラゴンを狩りに行きましょう」
「そうだなそれが良い。
善は急げと言うしな」
「ちょっと待って、良く考えよう、ドラゴン何て俺が勝てっこないよ」
「大丈夫です、私達3人でも何とか1頭なら倒せますから」
「そうだぞ、みんなで狩れば10日で3頭なら何とかなるだろう」
「ちょっと待て、3人なら10日で3頭だろうけど、2人なら2頭で良いんだろ？」
「私を仲間外れにしないで下さい、アンとファラがロックのお嫁さんになるなら私もです」
「だそうだ。良かったなこの村で人気の3人を嫁に出来るなんて」
「いやだ～、まだ死にたくない」
「大丈夫・大丈夫、私達がいるから」
「そうです、大丈夫ですこれから4人で力を合わせて生きていきましょうまう」

「死にたくない～」

夕暮れ迫る村に何ともハイテンションな叫び声が響いてはまた響く、彼等を遠巻きに見ていた村人達は何ともやるせない顔をしていたそうだ。

「スピー…スピー…」

ファラはアンの背中に居たよ忘れ去られていた訳じゃないよ。

初めての狩りに向けて

村長宅でのまとめ

村の中でもひときわ大きな家に強制的に連れられ、村長なる頭から鹿のような角を生やした（これが竜人の特徴と後から知ったが、竜人1人1人で形が異なるそうです）今にもぽっくり逝ってしまいそうな爺さんに、簡易的に自己紹介を済ませてこれからの住む場所などの話しをしようとしたら。

「「「娘は嫁に出さんー」」」　と、革で出来た幕をぶら下げているだけの玄関から3人の父親だろう男達が押し掛けてきて、結婚反対の意思がひしひしと伝わる形相でこちらを睨みつけて来る傍ら、

「おじゃましますわ」から始まりぞろぞろと3人の母親だろう女性達が、

「ふむふむ」「あらあら」「まあまあ」などなど沢山の本当に沢山のご両親？えっアンとファラが父1人母2人、レミが父1人母3人の合計父3人と母7人？のご意見を貰い、明日にでも狩りに行き3人を養うだけの力があると認められれば結婚を認めるとの判断を下されました。　父親達の意見は血の涙と共に母親達の意見に流され泣く泣く了承させられていた。

ロックの今日の寝床は流石に結婚を許されたとはいえ、まだ力も示していないのに「「「同じ場所はいかん」」」と、父親達に最後の悪足掻きを食らい村長宅で朝を迎えることになった。

異世界１３３日目の朝、村長宅で久し振りのしっかりと味の付いた朝ご飯を食べさせてもらい、彼女達の住んでいる成人の独身女性が共同で住んでいるという長屋を目指す。
この村では成人したら男も女もそれぞれの専用の共同で生活する家に移り、結婚するまで同性しかいない家で生活するそうだ。

『本当に良かった、いきなりむさ苦しい男達と共同生活するよりも、彼女達３人と生活する方が断然良いからな』

「おっ、あれが女達の共同生活する家かな？」

村の中を流れる川の側に、昔の日本家屋でお馴染みの長屋造り風のログハウスがあった。
玄関らしい場所は一つだが、普通の平屋を三軒ほど並べ繋げたような横幅があり、生活感溢れる雰囲気を纏っていた。

「あっ、おはようございます。意外と早起き何ですね」

横から声を掛けられ振り向いてみると、朝日をうけどちらが太陽か分からなくなるほど金色の髪を輝かせたレミが、顔を洗っていたのかサッパリとした表情で立っていた。

「おはよう。そう言うレミも早起き何だの」

「私は狩りの準備をしないといけないので、他の２人は……はぁ、何時も何時も人任せで」

「…そうなのか」

レミの表情を見ていると何ともないいたたまれなくなり、仕方なく手伝いをする事にした。

「なぁ、これなんだ？」

「それは、火爆弾（ファイアーボム）です。

リーフドラゴンの爪を粉末にして、火の実を墨にしたのを混ぜ、霊木樹の樹液で固めた物です」

しげしげとロックは手の中にあるテニスボール程の大きさの黒く丸い物体を眺める。

「使い方はエーテルを込めて只投げるだけなのですが、込めたエーテル量により爆発の規模が変わります」

「ふーん、手榴弾みたいなものか、んっ・こっちの貝殻に詰まっているのは？」

今度はホタテ貝程の大きさの二枚貝の中に青色の軟膏みたいのをみつけた。

「それは回復粉（ヒールパウンド）を霊木樹の樹液で軟膏状にしてた物です。主に傷に直接付ければ体内のエーテルと反応し傷口を治してくれます」

「便利なもんだな、となると武器などにもエーテル流して使うのか？」

「はい、武器にもエーテルを流せるようにモンスターの素材を使い切れ味を上げたり、重さを軽くしたり、他にも色々ありますがまずはロックの武器を作らなくては」

「そうだな…？そう言えば今日の狩りに俺は何を持って行けば良い？」

ふと、自分の武器も無く腰巻き一枚でリーフドラゴンと名前の付いた、まだ見ぬ強敵に挑むのかと不安になったりしたが。

「今日は、私達3人で相手をしますのでロックはリーフドラゴンの動きを良く見といて下さい」

「う～ん、情けないが今回は勉強のつもりで頑張らせてもらいます」

「そんなに気を張らなくても、あら2人共起きたみたいですね。すぐに着替えて来るので待っていて下さい」

ロックが頷くと、レミはとぼとぼと川に向かって歩くアンとファラを見て急いで家に戻り身支度を始めた。

ロックの感覚で約３０分程したら準備を終えた3人が姿を見せた。

今から狩りに行くといいのに3人の格好は相変わらずの露出で、アンとレミは、革で出来たビキニアーマーよろしくと言った上下に、膝までの革で出来たブーツ。ファラは、革の胸当てみたいなトップで魔のおっぱいを包み込み、下は革のホットパンツにブーツと3人揃っていかがわしい格好で現れた。

「おはよう、待たせたな」

「ぉはよ～、待った」

「おはよう、待っている間に色々教えて貰ったからそんなに苦じゃ無かったよ。
それにしても…狩りに行くにもそんな格好なんだ」
ロックが3人の姿をまじまじと見て良いのか悪いのか、朝からムンムンな気を起こさないように心を静めていると。
「これは、先ほど教えた火爆弾（ファイアーボム）などと同じで、エーテルを流すと身体全体をエーテル膜で包み込むので見た目よりもしっかりしていますよ」
「そうだぞ、それに肌を出していないと肝心のエーテルを吸収出来ないからな、それとも…ムラムラしてきたか」
「んなっ、そんな訳ある」
「あるのかい…正直だな。
まっ、今日の狩りが成功したら私達の身体を好きにしていいのだからな。
死ぬ気で頑張ってもらうぞ」
そう言うと、アンを先頭に村の出口に向かって歩き始めた。
「ちょっとごめん、お願いがあるんだけど」
不意にロックが三人に話し掛けた。
「何でしょうか」
「なんだ？」
「……？」
ロックは先程レミと道具の準備をしている時に思い出したのだ

が。

「すまないが、昨日初めて会った川を遡ってくれないか。俺の武器やら道具などを川辺に置きっぱなしで来てしまったので」

すまなさそうな顔で三人に頼むと。

「そうですね、ちょうど霊木樹も尽きてきた所なので川辺を散策しながら行きましょう」

「レミもか、実は私もそろそろ補充しときたかったとこだ」

「ファラも…」

三人共、霊木樹なる物が尽きかけていたみたいでロックのお願いも簡単に受け入れて貰えた。

「じゃあ、改めて行こうか。　最初に目指すは俺の荷物を忘れて来た場所で」

「はい、参りましょう」

「よし、今度こそ行くぞ」

「お〜」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8454v/

異世界生活始まりました

2011年8月22日14時14分発行